
さよならのなみだ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならのなみだ

【Nコード】

N1317L

【作者名】

久芳

【あらすじ】

涙がこぼれそうになるのを、私はずっと、我慢していた。高校生活最後の、卒業式というこの日に。私の恋は終わりをむかえるのだった。

涙が、こぼれそうだった。

「 広崎舞美」

名前を呼ばれて、私は「はい」と返事をして立ちあがる。その声は自分でも驚くほどからからにかすれていて、けれどその頼りない声に笑う人は誰もいなかった。

昨日の予行演習を思い浮かべながら、私は背筋を正して、ゆつくりとした足どりで壇上へとのぼる。階段で足元を確認しようとうつむくと、熱くなった目頭の潤みが増して視界が歪んだ。

「卒業、おめでとう」

柔和な笑みを浮かべる校長先生から卒業証書を受け取って、深く一礼をする。これが私の、高校生活最後のイベント。むかえてみると案外、あつけないものだった。

自分の席に戻る途中、次の生徒の名前を呼ぶ担任の声が聞こえる。私たちがはじめて担任を受け持ったクラスだったただけあって、感動もひとしおなのかもしれない。彼の声は涙まじりにふるえていた。その声につられたのか、鼻をすする音があちこちから聞こえてくる。隣の席の子は肩を小刻みに揺らしながらハンカチで目をおさえていた。男子の列からは嗚咽まで聞こえてくる。こんなに泣いているのは私たちのクラスぐらいだった。

鼻の奥がつんとして、私はもらい泣きしそうになるのを懸命にこらえる。涙を吸ったまつげが重くて、閉じたまぶたを再び開けるとがなかなかできなかった。

泣いちゃだめ。そう、自分に言い聞かせる。

まだ、涙を流してはいけない。
今日、この恋は終わるから。
そのときに、涙を流すと決めたんだから。

片想いの始まりは入学式だった。
学校のある日は毎日顔を合わせていた。
さらに部活も一緒だった。

彼に対する想いは日に日に増していったけれど、私は決して、その想いを伝えることはしなかった。

自分の中で気持ちが自然とおさまっていくのを待っていた。
けれど、どんなにあきらめようと思ってもあきらめることができなかった。

だから私は、この最後の日に、三年間の片想いにピリオドを打つことにしたのだった。

「舞美、式の最中泣いた？」

「私は泣かなかったよ」

滞りなく式が終わり、教室に戻った私たちに待っていたのは、最後のHRだった。

頬杖をつきながらぼんやりと教壇を眺めていた私に、隣の席の野宮修が話しかけてくる。彼とはなんのご縁なのか、入学初日に隣の席だったことをはじめとして、なにかと高校生活を一緒に過ごした仲だった。

「おれ、なんか知らないけどテッローに名前呼ばれたらすっごい泣きそうになつてさ。我慢して卒業証書もらったけど、戻るなりもう、むせび泣き」

あの嗚咽の主は彼だったらしい。

「みんなけっこう泣いてたよね……」

教室をぐるりと見渡してみると、みんなまだ、目に赤みが残っている。マスカラの落ちを気にした女子たちは早々とメイクを直していたからわかりづらいけど、鼻の頭の赤さは塗っただけではすべて隠せない。数多い三学年の生徒の中でも、私たちのクラスは抜きん出て涙を流す人が多かったようだ。

「テツローに泣かれたら、そりやおれらも泣くしなくなるよな」
とうの担任、小関哲郎は、最後のHRでみんなに良い話をしようとしているのに、ちゃちゃをいれられたりなんだりで結局うまく話すことができなくなっている。まだ年も若く、私たちの兄貴分のような存在だったテツローは、誰とでも分け隔てなく接する姿がみんなからとても好かれていた。

「……ほら、また泣いてるし」

「ほんと、テツローって涙もろいよね」

入学したときにはまだ新婚ほやほやだったテツローだけど、今ではもう立派に一児の父親だ。けれど情に厚くて涙もろいところはいつまでも変わらなくて、教壇で涙をぬぐう姿にはなぜか私たちと同じにおいがした。

「そういえばさ、修。部活の送別会の話ちゃんと覚えてる？」

「テツローの話聞かなくていいのかよ」

話しかけてきたのは修のほうからだというのに。私はもらい泣きしそうになっている彼の顔を見て思わず笑ってしまった。

修もテツローと同じで、実はけっこうな泣き虫だったりする。弱
いときにめそめそ泣く泣き虫ではなく、感情が昂ぶったときや感極
まったときに、惜しげもなく涙を流す男泣きの泣き虫だった。

「最後に部長から部員に挨拶お願いしますって、言われてたでしょ
？ 修、ちゃんと考えてる？」

「……忘れてた」

修とは同じ写真部に入っていて、彼が部長になってからはなにか
と私が補佐のようなことをしていた。副部長は他のクラスにいるの
だけど、やっぱり同じクラスに部員がいるとなにかと伝言を頼まれ
たりしたので、送別会の件も私はすこし詳しく耳にしていたのだ。

「最後ぐらいちゃんとやろうよ」

「おれも超えてきとーな部長だったからなあ」

めんどくさいなと呟きつつも、きっと彼は挨拶の内容をちゃんと
考えているに違いない。表面上はやる気がないような軽い態度ばか
りとなるから誤解されやすいけど、修はやるときはちゃんとやる。だ
から私も顧問も彼のことを信頼していた。

高校生活の中で、一番一緒にいたのは修だった。いろんな話をし
て、一緒に笑ったり怒ったりした。テスト前の一夜漬けを共にして、
その後の点数の見せ合いで半狂乱した仲でもあった。学校祭では感
動のあまり、一緒に泣いたこともあった。

彼とは同じ大学に進学が決まっている。卒業してもきっと、一緒
にすることが多いのだろうという、漠然とした予感があった。

「……舞美」

「なあに？」

ようやく涙が落ち着いたらしいテツローが、贈る言葉の続きを話
しはじめる。その深みのある声に溶けこませるように、修は横目で
私を見ながら小声で呟いた。

「やっぱり今日、言うのか？」

「……………」

その声に、私は黙ってうなづくことしかできなかった。

下手に声を出すと、また、我慢していた涙がこぼれてしまいそうだったからだ。

H Rの最後をテツローの胸上げで飾ると、みんなは続々と、帰りの仕度を始めた。

後輩からもらった花束を両手いっぱい抱える子もいれば、皆勤賞の盾を誇らしげに鞆につめる子もいる。そのまま玄関に降りてまっすぐ帰る子もいるけれど、大半はお世話になった教師や後輩たちとの記念写真を撮りに行っているようだった。

私や修の元にも、部活の後輩がたくさん写真をねだりに来た。修は女子から人気があったはずなのだけど、意外にもブレザーのネクタイを欲しいという子は誰もいなかった。

隣に私がいたから、みんな遠慮して言いづらかったのだと思う。

けれど私も修からネクタイをもらうつもりはなかった。

二年生の終わるところからすこしの間、私は修と付き合っていた。

今はもう別れたけれど、関係がぎくしゃくしていることはなく、友達以上恋人未満の仲はまだ続いている。だから知らない人はまだ私たちが付き合っていると思っっているし、受験のために一時的に別れて、またもとの仲に戻るのだろうと勝手に憶測している人もいる。まことひそやかに囁かれている噂に対して、私たちは特に何も言うことはなかった。

「舞美、職員室行つて写真撮つてこないのか？」

荷物はまとめたけれど教室から出ようとしない私に、同じく荷物だけはしっかり鞆にしまいこんだ修が訊いてくる。時間がたつにつれ人が少なくなっていく教室で、私たちは窓から校庭を見下ろして

時間をつぶしていた。

「だってまだ混んでるだろうし」

「そっか」

「修はいいの？」

「おれは別に。どうせ送別会とかで会うし」

「そう……」

返事もおざなりに、心ここにあらずで校庭を眺める私に、修は肩をすくめてあたりを見回した。

「舞美」

「ん？」

呼ばれて顔をあげると、背中にたらした私の髪に、修の手が触れる。気づけば教室にはもう、私と修しか残っていなかった。

「なんで泣かないの？」

髪から伝った指先が、ようやく潤みの落ち着いた目じりを撫でる。

修は背が高いから、私は必然的に見上げるかたちになってしまう。

彼の指先は慣れたように私の頬をすべると、あごのラインを撫で、くいと顔を上向かせた。

私が目を閉じると、まもなくして修の唇が重なった。

軽くついばむように、彼は何度も唇を寄せてくる。時折長く重ねて、離れて、また重ねて。唇を割ってとろりとした舌が歯茎を撫でて、私はただ黙ってそれを受け入れていた。

「……なんで、泣かないの」

唇を離して、修が問うた。何も言えぬままうつむきそうになる私の頬を両手で包んで、彼はしっかりと顔を覗きこんでくる。

「いつも、泣きそうな顔したのに。なんで今日は泣かないわけ？」

修と付き合っている間。したことはキスまでではない。

行き着くところまでいった。だからこそきつと、今のようにお互いをよく理解した関係になったのだと思う。

修のことは嫌いじゃなかった。たぶん好きなんだと思う。だからこそ、キスにしても身体を触られても、嫌だと拒むことはなかった。私はそれを利用していた。

修といれば、自然と気持ちが傾いていくと思っていた。修のことが『彼』以上に好きになって、忘れることができると思っていた。

けれど私の気持ちは正直で、どんなに身体を偽ってみても、心の底では彼のことが頭をちらついて離れなかった。

修といて楽しいはずなのに。ふとした拍子に切なくなつて、泣きそうになつて我慢した。その涙が修への罪悪感なのか、それとも彼への恋しさなのかは自分でもよくわからなかった。そんな中途半端な関係をずるすると続けて、結局終わりを告げたのは私からだった。修はすべてを知って私と付き合っていた。

私が他の人に片想いしていることも、その気持ちを伝える意思がないことも、この不毛な恋心をなんとか自分の中で消してしまおうと思っていることも。そのために修を利用しようとしていることもわかっていて、私に触れてきた。

私から付き合おうと言って、私から別れようと言ったのに、その

自分勝手に文句ひとつ言わずに黙ってうなずいてくれた。

修のことを好きになれたらどんなによかっただろう。

「……修」

「ん？」

「ごめんね」

修はそれに、私の頭を撫でるだけだった。

彼の大きな手はいつも、私を落ち着かせてくれた。ひどく感情的になって泣き出してしまったときも、唇を噛みしめてうつむいたときも、いつも穏やかに私に触れていてくれた。すぐるように指先にしがみついても、ふりほどくことなく私が離すまでずっとつないでいてくれた。

静まりかえった教室の向こうで、廊下では卒業生を探す後輩たちの足音が聞こえてくる。修は肩を抱くように私に腕をまわして、入学してからずっと伸ばし続けた髪を撫で続けてくれていた。

修にこうしてもらっていると、私の中のごちゃごちゃに絡まった感情が、少しずつほぐれていく気がした。

独占欲や、嫉妬心。片想いを続けていく中で、私を困らせたのはその醜い感情だった。彼が自分を見てくれることはないとわかってるのに、どうしても、他の人といえるのを見ると胸がもやもやしてしかたなかった。私のことを一番にしてもらいたくて、でもそんなわがままなことを思う自分が嫌で、おさえこもうとしても結局できなくて、そんな葛藤を長く長く、続けていた。

それも、今日で終わりにする。私は修に別れを告げたとき、自分の中でそう決めていた。卒業式の日を迎えても、どうしてもこの想いを捨てることができないのなら、潔く伝えてばっさり断ち切ってもらおうと思っていた。

彼のことを思うと涙が出た。自分でもどうしてかわからないくらい、胸の奥が熱くなるのだった。そしてそれを鎮めるかのように、涙があふれ出すのだった。

涙を流しても結局想いは鎮まらなくて、むしろ強まるばかりで。

自分の力ではもう、どうすることもできなかった。

こんなに人を好きになったのははじめてだった。

「……舞美、泣いていいんだぞ？」

目を閉じたまま唇を噛みしめる私に、修が心配そうに声をかけてくる。彼はいつも、そう言うては私を泣かせてくれた。私は何度、その広い胸に甘えたかわからない。彼も彼で、告白を渋る私を諭すことも突き放すこともせず、ただずるすると気持ちを引きずり続ける背中を、飽きもせずさすり続けてくれていた。

「……泣かない」

どこまでも強情な私に、修はそつと息をつく。まぶたを伏せて何も見えなくても、私はその息遣いで彼が笑ったのを知った。

どうして笑ってくれるんだろう。私がもし修だったら、きっと呆れかえって見捨ててしまっただろうに。

「まだ、泣かない。でも、今日で、泣くの終わりにする」

声がふるえて、少しずつしか話せない。これで本当に、私は彼と話すことができるのだろうか。自分でも不安になってしまいうぐらい、涙の袋を引き締める糸はもろく切れてしまいそうになっていた。

「……そっか」

まぶたの向こう側で、修が動くのがわかる。彼の影で視界が暗く覆われたかと思うと、まぶたにそつと口づけされる。そして彼は手の動きを止め、ゆっくりと身体を離れた。

ようやく開いた私のまぶたは、涙を我慢しすぎたためか、からからに乾いていた。真つ赤に充血しているであろう目で見上げた修は、私の情けない顔を見て、たれがちなまなじりを下げてみせる。

「おれ、舞美のこと、好きだから」

修の告白を聞いたのは、これが初めてだった。

そして私は、それに、何も言うことができなかった。

気づいていた。私はそれを知っていて、だからこそ修のことを利用したのだ。好きな人には他に好きな人がいるという、むくわれない気持ちの痛みは誰より私自身がよくわかっていたはずなのに。私は自分のことばかりを考えて、修の気持ちも気づいているようで気づかないふりをしていた。

はじめて彼の言葉で聞いて、いかに自分のしたことが身勝手だったかをあらためて思い知る。そんな自分をどうして修は好いていてくれるのか、私にはさっぱりわからなかった。

再び涙がこみあげそうになる私に、修は返事を求めなかった。視界が歪んでうまく見えないけど、彼のその表情は微笑んでいて、けれど翳りがあることをまなざしは隠せてはいなかった。

「じゃあおれ、テッローのそこ行ってくるわ。送別会の話とかもちやんと聞いてくる」

最後にまた、ぽんと頭に手を乗せて、修は教室をあとにした。

その後ろ姿を見送りながら、私はすと鼻をすする。こらえた涙が、涙腺を伝って鼻に降りてくる。

結局私は、また泣いているのだった。

涙はなぜ流れるんだろう。

どうしてこんなにあふれるんだろう。

「私、ばかだ……」

呟く声は誰にも聞かれることなく、教室の静寂に吸いとられて消えていく。目頭を押さえると、コートの衣擦れが響いて、なによりもついたため息が一番大きかった。

私はこんなに泣き虫じゃなかったはずなのに。

子供のころはよく泣いていた。嫌なことや痛い思いをしたりすると、すぐにわんわんと泣きわめいていた。赤ん坊のころは毎日泣いていただろうし、それは泣くことでしか自分の意思を伝えることができなかったからだ。

それでも大きくなって言葉を持つと、言いたいことを伝えられるようになった。痛みや不満で流しそうになる涙をこらえることも覚ええた。だから泣く回数は減ったはずだった。

映画や小説を読んで、感動して泣いたことは何度もある。嬉しいことがあつて、涙を流したことだってある。涙は悲しいときにだけ流れるものではないとちゃんと知っていた。

でも、どうして、恋をすると涙が出るんだろう。

どうして、その人のことを想うと涙が出るんだろう。どうして胸が苦しくなるんだろう。

切ない、と、言葉にすればただそれだけのことなのに。涙は勝手に流れ出る。私はこの三年間、この涙を一体何度流したことだろう。子供のころに流した涙と、今自分が流している涙は違うもの。

感情を伝えるために流す涙と、あふれ出る感情がとまらずに流れる涙は、違う。

今日で、この、恋の涙はもう終わりにする。次流すときがまた来るかもしれないけれど、それはまた、別の人を想って流したい。だから私は、ずっと涙をこらえ続けていた。

「あれ、広崎？」

ひとりになった教室でぼんやり時間がすぎるのを待っていると、ふいに扉の開くきしんだ音がした。

「先生？」

「最後に残ってるのが広崎っていうのはなんだか意外だな」

入ってきたのはテッローだった。

「野宮のこと待ってたのか？ 送別会の話はもう終わったはずだけど……お前たちはほんと最後まで仲いいんだな」

テッローは写真部の顧問だった。修も送別会の話が終わったんだからもう家に帰っているはずだけど、先生もまた、私が修とまだ付き合っていると思っている人の一人だった。

「たまに二人で顔出しに来いよ。お前たち後輩に人気あつたし、喜ぶぞ」

「本当は先生が来て欲しいんじゃないですか？」

「ばれたか、と齒を見せながら笑って、テツローは教壇にのぼる。何も書かれていないまっさらな黒板を見て、ほうつと息をつく横顔は、式とHRでさんざん泣いた名残か、今もまだ泣いているかのようなしおしおのままになってしまっていた。

「職員室に残ってないと、誰か会いに来るんじゃないですか？」

「ひととおり落ち着いたからもう大丈夫なんだよ。用事があつたらきつと教室に来るだろうしな」

毎朝SHRでそうしたように、テツローは教卓に両手をついて、誰も座っていない机を順番に目でゆつくりとたどっていく。窓に背をあずけた私は、コートのボタンをしっかりとめ、卒業式の余韻にひたる先生を見つめていた。

スーツの胸ポケットに、誰が入れたのかクラス一同であげた花束の白いマーガレットがさしてある。泣き虫で寂しがりの先生にはその可愛らしい花がとても良く似合っていた。

「三年間って、あつという間だったな……」

感慨深げに呟くテツローは、きつと頭の中で、私たちが入学してきてからの記憶をめぐらせているに違いない。目線はどこか遠くを見ているようで、その表情は寂しそうだけど、どこか誇らしげでもあった。

「広崎は、高校生活、どうだった？」

「どうって、いうと……？」

「俺はまだ、広崎たちに自己紹介したのが、ついこの間のことのように思えるんだよな。もちろんちゃんと三年間の記憶もあるんだけどさ、一日いちにちが濃くて、それを追いかけているうちにあつと

いう間に卒業式が来た気分だ」

先生といたって、テッロー自身はまだ教師としての経験は浅いほうだ。生徒と本気で喧嘩したことだってあるし、大人気ない態度をとることも多くあった。それでもちゃんと、進路に悩む子には相談に乗ってくれたし、授業よりも勉強よりも遊びたい気持ちが強い私たちの気持ちをわかりつつもしつかりと諭してくれた。ベテランの教師とは違う青臭さみたいなものに、きっと私たちは心を開いたのだと思う。

「私もたしかに、あつという間だったとは思いますが……」

この三年間は、ほんとうに、たくさんあった。学校の行事は楽しかったし、テストはやっぱ辛かった。部活ではいろいろ貴重な体験ができたし、進路をどうするか決めるにはやっぱりそうとう悩んだ。

人を好きになったこと。それがとても辛かったこと。苦し紛れに修と付き合ったこと。毎日がたくさんの気持ちに満ちていて、そのときは時間なんてまったく感じなかったけど。いざ今日という日が来てみると、本当に風のように過ぎ去ってしまった三年間だった。

「でも先生は、学校のこと以外にも、いろいろあったじゃないですか？　子供だって産まれたんだし」

「そう、子供もあつという間に大きくなったよ。今日連れてこれたらよかったんだけど」

テッローが毎日自慢していた愛娘の姿を、私は一度だけ見たことがあった。三年の学校祭のときに、模擬店を見に来たのだ。遠目でほんのすこしの間だったけれど、子供を抱き上げる先生の顔がやらでれでれた父親の顔だったことをよく覚えている。

奥さんのことを話題に出すとみるうちに表情が緩む愛妻家ぶりがまた面白くて、みんなことあることにからかった。

そんな日々も、もう、戻ってこない。

「広崎、野宮のところ行かなくていいのか？　早くしないと先に帰るかもしれないぞ？」

「修のこと待ってたわけじゃないんで」

私の言葉に、テッローが意外そうに眉をあげる。そりゃあ、卒業式が終わってひとりで教室にいる生徒は不思議に見えるに違いない。けれど私だって、先生のように、最後の日の余韻を味わいたかったのだ。

「……先生」

「なんだ？」

彼の顔をまっすぐに見て、私は言った。

「私、先生のことが好きです」

end

入学式の日。笑顔で自己紹介をした先生を見て、かっこいいなと思った。

けれどすぐに生徒からの質問で、結婚したばかりだということを知った。

先生に恋をするなんて嫌だったから、既婚者であることに最初はほっとしていた。

けれど、興味を持って入部した写真部の顧問が先生であったことや、二年生のクラス替えでまた担任になったりして。毎日顔を合わせるうちに、どうしても意識するようになってしまっていた。

テツローの話はとても面白くて、授業もやる気が出て、部活も楽しかった。叶わない恋だとわかっていても、彼を想うと胸が高鳴るのがとまらなくて、この想いは落ち着くまで心に秘めておこうと思っていた。

けれどテツローの子供が産まれたとき、私の中でなにかが変わりはじめて、彼の幸せを素直に喜べない自分に気がついた。

決して受け入れてもらえないとわかつているのに、彼の一番になりたい自分がいた。

子煩悩っぷりを発揮して、毎朝撮ったばかりの写真をみんなに見せる姿や、進路の相談をする女子と話しているのを見るだけでも、思わずむっとしてしまう自分がいた。

気づけばもう、後戻りできないくらい好きになってしまっていた。そんな嫉妬心や独占欲をなくしたくて、でも簡単に相談できる相手はまわりにいなくて。唯一心を開けたのが修だったから、私は修を利用してどうにか自分の気持ちに折り合いをつけようとして。

でも、結局、できなくて。

気持ちを抑えることができないのなら、伝えて、返事を聞いて、それでちゃんと終わりにしようと思ったのだ。

たとえ結果が見えていたとしても。

「……先生？」

私の告白に、テツローはただただ、こちらを見つめ返してくるだけだった。

突然の生徒からの告白に困るのは無理もないと思う。とくに私は、修という彼氏がいるように思われていたのだ。だからよけいに彼も、私の口からこんなこと言われるだなんて思ってもみなかったに違いない。

広崎、と、私の名前を呼ぶこともしない。生徒から告白されたのはたぶんはじめてなんだと思う。なんと答えたらいいか言葉を探しているのか、まばたきの数がやけに多い。

私は、ただ一言、ごめんと行って欲しいだけなのに。

そうしたら、終わりにできるのに。諦めがつくのに。

卒業式のこのときを選んだのは、後になってお互い気まづくなることを避けるためだ。クラスや部活の送別会のように言うのがよかったかもしれないけど、そうすると想いを伝える時間があるとは限らなかった。

長い沈黙に耐え切れず、先に視線をそらしたのはテツローだった。

「……ごめんな」

搾り出すようなその声に、私はただ、うなずくしかできない。つめていた息を、細く長く吐き出す。そして、この日のためにずっと考えていた言葉を、そつと舌の上に乗せた。

「奥さんと子供が大好きで、幸せそうにしている先生が好きでした」
嘘だ。本当は、先生が一番でいられる奥さんと子供がうらやましくてねたましくてたまらなかった。

でも、こう言えば、先生が困ることはないと思った。ひとりの男

性として見ているのではなく、夫であり父であるテツローを見ていると言え、あとで彼が悩むことも軽くなるだろうと思った。

たとえそれがうわべだけの言葉だとわかっていても。ただの綺麗ごとだとしても。私の自己満足だとしても。

憧れの恋だということにしてしまえば、

「……ありがとう」

彼はそう言うことができるから。

本当の気持ちを知っているのは、私自身と、修だけ。それでいいと思う。

いい恋しろよ、とか、もつと他にいい人がいるとか。そんなよい言葉はいらなかった。ただ断ってもらえればそれでよかった。

「……じゃあ、私、帰りますね。先生、今までありがとうございました」

最後の最後だというのに、自分でもわかるぐらいぎこちない笑顔になってしまった。顔を見たつもりだったけど、わかるのは胸元のマーガレットだけで、どんな表情をしているかなんてまったくわからなかった。

決して振り向くまいと、教室を出た。彼が後を追ってくることはもちろんなかった。

階段を降りて玄関にさしかかったところで、堰を切ったように、まぶたから熱いものがこぼれだした。

私はそれをぬぐうこともせず、ただただ頬を伝わせ、流し続けた。

たくさんのさよならを、この涙ですべて流してしまおうと思った。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317/>

さよならのなみだ

2010年10月14日12時12分発行